

## 日本の音環境と伝統音楽

遠藤徹 (代表、音楽演劇講座) 齊藤豊 (世田谷小学校)、戸澤有紀子 (世田谷小学校)  
山口明子 (音楽演劇講座 非常勤講師 邦楽) 越後真美 (音楽演劇講座 非常勤講師 雅楽)  
遠藤明日香 (音楽演劇講座 大学院生) 真鍋幸枝 (音楽演劇講座 大学院生)

### 1. WGの概要

四方を海がとりかこみ、山や川、湖や平野、そこに生育する動植物などに囲まれた日本列島は、豊かな自然環境に恵まれ、古来自然の移ろいの中で人々の暮らしが営まれてきた。日本の伝統音楽はそのような日本列島の自然が生み出す音環境と断絶したのではなく、その環境下で磨かれた音に対する人々の感性を基調として形作られてきた。しかしながら、機械文明が発達した今日、我々を取り巻く音環境は大きく変化した。近現代の音環境の劇的な変化は、明治時代以降の西洋音楽の導入および音楽教育における過剰な比重とも相まって、伝統音楽を遠い過去のものとし、それを培ってきた感性、ひいては心を理解できないものにしてしまった可能性がある。

しかしこうした現代にあっても古来の音環境が皆無になったわけでは決してない。近代文明が作り出した音が古来の音環境を圧倒しているため、容易には聞き出せなくなっているだけの場合も少なくない。したがって少し意識すれば、古来の自然の音やそれと調和して形作られてきた伝統的な行事の中で生み出される種々の音も随所に聞くことができる。

本研究は、そうした現代に伝えられている古来の音環境を掘り起こし、伝統音楽との関連性から分類し、洗練された伝統音楽の表現への連続性を実感できるように、伝統音楽の具体的な曲目と音環境を結び付ける試案を提示するものである。その際、伝統音楽のジャンルは問わず、曲目は横断的に配置することにした。こうした試みを通じて、日本人が伝統的に培ってきた自然の音や行事の音を、意識的に聞き取る能力を養い、伝統文化への理解を深めるとともに、自然を愛し、豊かな心をはぐくむ教育の一助となることを企図した。

### 2. 2年間の研究成果

研究のプロセスは昨年の報告書に記したので、ここには結論として提示する試案のみを記したい。

自然の音や伝統的な行事の音は種々のものがあるが、それらを学習教材になりうる伝統音楽の曲目との関連性から次の(イ)～(ト)の7種に分類した。伝統音楽の曲目Aは比較的理解しやすいと思われるもの、曲目Bは高度な表現と考えられるものである。自然の音や伝統的な行事の音を具体的に識別してから、A→Bの表現へと理解を深めていくことを一応意図しているが、場合によっては曲目から音環境へという進行も考えられ得る。(イ)から(ト)の順序には特に意味はない。なお、伝統音楽に加えて、なじみが深いと思われる童謡や唱歌なども、橋渡的な役割として一部に配置してみた。\*に簡単なコメントを付した。

	曲目A	曲目B
(イ) 海の音	→「春の海」(宮城道雄作)	→「青海波」(雅楽) →「千鳥の曲」(箏曲)

\*Bの「青海波」は、男波、女波として、波の音を二種に分けて太鼓で表現している。男波と女波は交互に現れる。「千鳥の曲」では手事(器楽)の部分で、箏が波を胡弓が松風を表現しているところがある。

- (ロ) 川の音 → 「春の小川」 (童謡)  
→ 「花」 (滝廉太郎作)  
→ 「佃合方」 (歌舞伎)

\* 「花」と「佃合方」は、どちらも隅田川の情景に基づいており、西洋音楽の受容以前と以後の表現の変化の例にもなり得る。

- (ハ) 雨・雪の音 → 「雨降り」 (童謡)  
→ 歌舞伎の下座音楽の雨音 → 歌舞伎の下座音楽の太鼓による雪音

\* 雨音はあるが、雪音は現実には存在しない。歌舞伎の下座音楽でどのように表現しているか。直接的な描写から象徴的な表現への昇華の例として良い例となり得る。

- (ニ) 虫の音 → 「虫の声」 (唱歌) → 「松虫」 (能)  
→ 「虫の合方」 (歌舞伎)

\* 虫の音は周知のとおり日本人古来の音に対する感性を示す好例である。虫の音をいろいろ聞き分け、音具等で表現してみるところから始めると効果的であろう (これについてはすでに実行している例も多いと思われる)。直接的な描写を理解した上で、能の表現などにつなげることができると伝統音楽への理解が深まり、それらを生み出した感性に接近できると思われる。

- (ホ) 鹿の鳴き声 → 「鹿の遠音」 (尺八)

\* 今日、鹿の鳴き声を聞く機会はほとんどないので、鹿の鳴き声を識別することからはじめる必要がある。しかしひとたび鹿の鳴き声を識別できるようになれば、奥山に響く鹿の鳴き声が引き起こす情感は、意外に容易に理解できるようになるように思われる。

- (ヘ) お寺の鐘の音 → 「夕焼け小焼け」 (童謡) → 「祇園精舎の鐘の声、」 (琵琶)  
→ 「鐘の音」 (狂言)

\* お寺の鐘の音は、誰も聞き覚えがあるであろうが、あらためて良い音色の鐘の音をじっくり聞き、そこから喚起される感情を深く省みること、平家物語の冒頭の言葉 (平曲、薩摩琵琶、筑前琵琶など) もより実感をもって理解できるようになるように思われる。狂言の「鐘の音」は、擬音語の面白さに接近する素材としても有効と思われる。

- (ト) 神社のお祭りの音 → 「村の鎮守の神様」 (唱歌) → 「東遊」 (雅楽)  
→ 様々な祭り囃子

\* 祭りのときの賑やかな音は、現代の日本人にも身近な音の一であろう。祭り囃子に様々なものがあることを知った上で、賑やかな中に行われる厳かな神事や閑かな「東遊」の歌舞などへつなげることができると、伝統音楽への理解はさらに深まるであろう。

### 3. 教材活用への展望

上記の音環境は鹿の声を除けば、どこでも見出せるものであり、音を探し識別すること、そして、それらを、身近な音具で表現してみることが第一段階となる。これらは楽しいものでもあり、すでに学校教育で行っている事例は少なくないであろう。本研究で示した試案は、そこから、過去の日本人はどのような音楽作品を作っていたか、という方向に考察を進めていくというものである。童謡や唱歌を適宜はさみつつも、自然の音、伝統的な音を軸にして、歌舞伎、箏曲、尺八、さらには能狂言、雅楽へと進めるのが理想である。曲目はそれ自体でも学習教材になり得るものを選んだので、鑑賞教育と結びつけることも可能である。

さて、本研究を開始した当初の目的は、自然の音に対する感受性を深めることを通じて、古来の日本人が豊かにもっていた感性を回復し、伝統音楽への理解を深め、伝統音楽を少しでも身近なものにする一助とすることにあった。しかし研究をすすめる過程で、そうした方向性のみならず、音を通じて自然や先人の残した文化への畏敬の念を育むこともまた重要であると考えられるようになった。したがって、音楽表現の理解とは別に、音環境自体に目を向けることも大切であり、そこから音楽教育に止まらない展望もひらけてくるように思われる。